尾張旭市制50周年記念シンポジウム
～ともにつなごう　あさひの歩み・いま・未来～
開催記録

（開催日）　令和4年2月12日（土）
（場　所）　尾張旭市文化会館　あさひのホール

開催概要・目次

オープニング（市長挨拶）	P1
第1部 基調講演 「持続可能なまちづくりに向けて」 講師：内田俊宏氏（中京大学経済学部客員教授）	P1
第2部 まちづくりの提案発表 愛知県立芸術大学　美術学部デザイン専攻学生3名による発表	P8
第3部 パネルディスカッション　－あさひの歩みから未来へ－ 〈コーディネーター〉 　伊藤雅一氏（名古屋産業大学教授） 〈パネリスト〉 　松本哲男氏（愛知県森林公園管理事業部長・名古屋大学名誉教授） 　水津　功氏（愛知県立芸術大学教授） 　水野智之氏（中部大学教授）	P13
クロージング（市長挨拶）	P29

オープニング

司会　皆さん、こんにちは。本日は、尾張旭市主催、市制 50 周年記念シンポジウムに来場いただき、誠にありがとうございます。立春が過ぎ、本日は春らしく、暖かい一日です。市制 50 周年を記念した本シンポジウムでは、尾張旭市のまちづくりについて、皆さんと一緒に考える時間にしていきたいと考えています。私は、本日の司会進行を務める、アナウンサーの小倉理恵です。よろしくお願いします。本日は、手話通訳の方にも協力をしてもらっています。手話通訳は、愛知聴覚障害者センター登録通訳者の皆さんです。よろしくお願いします。本シンポジウムは、感染防止対策を徹底して開催します。マスクを外して登壇する場合は、感染症対策を講じた上ですので、ご了承ください。開催にあたり、主催者を代表して、尾張旭市市長の森和実よりごあいさつさせてもらいます。

森　皆さん、こんにちは。尾張旭市長の森和実です。本日は、市制 50 周年記念シンポジウムに参加をしていただき、誠にありがとうございます。開催にあたり、さまざまな分野で活躍されている有識者の皆さんには、快くお引き受けいただき、心より感謝しています。本市は、令和 2 年 12 月に市制 50 周年を迎えました。昨年度からの 2 年間を記念事業実施期間と定め、さまざまな事業を行ってきましたが、この間、多くの市民や団体の皆さんにもお祝い事業を実施してもらい、市制 50 周年を共に盛り上げてきました。この場を借りて、感謝の意を表します。ありがとうございます。本シンポジウムは、2 年間の記念事業の締めくくりですが、『ともにつなごう　あさひの歩み・いま・未来』と題し、これまでとこれからの尾張旭市を皆さんと一緒に考える場にしたいと考えています。長時間にわたりますが、最後までお付き合いいただきますようお願いします。本日は、ありがとうございます。

司会　森市長、ありがとうございました。本日は、祝電を預かっていますので、ここで披露させてもらいます。尾張旭市制 50 周年記念シンポジウムの開催、誠におめでとうございます。大都市、名古屋に隣接しながら、その都市機能を享受できる近接性とともに、翻っては適度な距離感を保ち、全国有数の都市公園たる森林公園の存在、良好な居住環境という次の時代に向けての大きなポテンシャルを持つ公園都市、尾張旭市の発展に大きな期待を寄せる者の 1 人として、本日のシンポジウムが新たな 50 年への大きな一歩となることを祈ります。衆議院議員、鈴木淳司様です。

市制 50 周年記念シンポジウムの開催を心からお喜びいたします。本日のシンポジウムが実り多く、意義深いものとなることを祈念するとともに、皆さんのご健勝をお祈りします。愛知県知事、大村秀章様です。市制 50 周年 PR 大使の青木さやか様からも祝電を預かっています。ありがとうございます。

第1部　基調講演

司会　第 1 部の基調講演に入ります。中京大学経済学部客員教授の内田俊宏先生が登壇されます。大きな拍手でお迎えください。内田先生は、学校法人梅村学園常任理事、株式会社壱番屋社外取締役も兼務されており、中京エリアの情報番組、テレビやラジオにも多数、出演するなど、幅広く活躍をされています。専門は、日本経済、地域経済、まちづくりです。本日は、『持続可能なまちづくりに向けて』と題し、講演をしてもらいます。内田先生、よろしくお願いします。

内田　皆さん、こんにちは。中京大学の内田です。ただ今、活躍をしていると言ってもらいましたが、テレビは日曜日の『サンデージャーナル』にたまに出演するぐらいです。ラジオは毎週、出演している

番組があります。大学とカレーの CoCo 壱番屋の社外取締役を務めています。尾張旭市にも店舗があるので、よろしくお願いします。本日は、尾張旭市の市制 50 周年の記念シンポジウムに呼んでもらいましたが、私が 2 歳頃には既に市ができていたようです。私の地元は青森県ですが、年齢としては非常に近いです。

記念シンポジウムの大きなテーマは、まちづくりです。これからの 30 年、50 年、100 年を見据えた場合に、持続可能なまちづくりといわれていますが、実際には勝ち負けがはっきりしています。日本創生会議では、消滅可能性都市の表現が使われていますが、持続できないまちも出てきます。その意味で、まちづくりに関するシンポジウムを開催している尾張旭市は、将来にかけても有望です。本日は、『持続可能なまちづくりに向けて』と題し、1 時間ほど話をさせてもらいます。

私がいる中京大学と尾張旭市の関係を調べてみると一昨年、ドラフト 1 位で中日ドラゴンズに入団した高橋宏斗君が中京大学附属中京高等学校の出身です。コロナ禍が落ち着いた頃に与田元監督と会食をしましたが、「彼は間違いなく数年後、ドラゴンズのエースピッチャーになるだろう」と言っていました。現在は、基礎体力を付けているところだと聞いているので、ぜひ期待していてください。与田監督だけに余談です。壱番屋に関しては、尾張旭市にも CoCo 壱番屋の店舗があります。今回、結果はあまりよくありませんでしたが、ショートトラックの吉永一貴選手は、CoCo 壱番屋が好きだそうです。彼は、中京大学の豊田キャンパスに通っています。辛うじてその 2 人が尾張旭市と少し関係があります。

本日は、非常に優秀、有望な若い選手も輩出している尾張旭市の持続可能なまちづくりに向けての基調講演として、世界経済や日本経済、東海経済、自動車産業など、さまざまな面から話をさせてもらいます。小見出しに書いてあるように地球、世界レベルで持続可能な社会の構築が不可欠になっています。皆さんも日々、体感されていることでしょうが、最近は日本周辺でも頻繁に震災が起きています。地震に限らず、台風や大雪などの自然災害が激甚化をしています。環境の側面からも持続可能性が非常に難しくなってきています。経済的にも格差と貧困の問題が世界中で起きていて、そこを解決しながらでないと環境問題等もクリアできません。

さまざまな問題をクリアしながら持続可能な地球、世界、日本、東海、尾張旭市を実現していくには、さまざまな視点からのまちづくりが必要です。今回は、コロナ禍で開催されていますが、コロナ禍の中でデジタル社会が加速しました。デジタル化は、新型コロナウイルスが指定感染症から見直しがされ、経済活動がコロナ禍以前に近い状態に戻ったとしても、加速することはあっても逆行することはないでしょう。その時代の中で、尾張旭市も含めて、まちをよりコンパクトに運営していかなければなりません。この辺りが実現できないと、若い人たちも流入人口として定住してくれない可能性が非常に高まっています。

本日は、幾つかの視点から説明をします。持続可能性に関するワードとしては、1 日に 1 回は聞くであろう SDGs です。これは持続可能な開発目標です。カラフルに色分けがされていますが、現在は 17 のゴールが設定されています。この前には、ミレニアム開発目標の MDGs があります。そちらは八つの目標ですが、今回の SDGs は 17 なので、倍増以上です。持続可能性に向けた目標としては、1 番が貧困をなくす、2 番が飢餓をゼロにする、3 番が健康です。尾張旭市は、健康都市を表明されていますが、健康寿命を長くして、人生を楽しむことです。単なる寿命だけではなく、健康寿命を重視している尾張旭市の視点も非常に重要です。4 番が教育、5 番がジェンダー平等、6 番が安全な水とトイレです。

この辺は環境に関しての目標で、7 番が再生可能エネルギー、13 番が気候変動です。近年は、地球温暖化ではなく、気候変動といっています。単純に温暖化で夏が暑くなるだけではなく、冬は寒くなって、

雪も頻繁に降ります。暑く、寒く、変動幅が非常に大きい状況になってきています。地震も頻発しています。14 番と 15 番は、海や陸の豊かさを守ることです。真ん中は、経済分野ですが、8 番が働きがいや経済成長、9 番が産業技術革新です。16 番が人や国の不平等をなくすという格差の問題、11 番が住み続けられるまちづくりをしていくことです。

12 番は、メーカーに対して使う責任、つくる責任という製造責任です。なぜ前回からこれほど倍増しているかというと、持続可能性を追求していく上では、誰一人取り残してはなりません。国や地域、国内の住民も取り残される人がいる状態だと、持続可能性がある方向になかなか進みづらいです。この後、環境についても見ていきますが、例えば原油一つとっても、産油国と消費をしている国々で利害がぶつかり合っています。持続可能な地球、世界、日本を展望すると、さまざまな目標を設定し、誰一人取り残さずに皆が納得できる状態で進めていかなければ、地球の方向性や世界の経済、日本経済、まちづくりはできません。

SDGs に関しては、何となく分かっているようで分かりにくいです。何となく分かるためには、歌手の YOASOBI が少し前に歌っていた『ツバメ』が参考になります。YOASOBI は、公募した文章を歌詞に取り入れて、歌を作っているらしいです。『ツバメ』のテーマは、まさに SDGs の持続可能性です。ツバメが人間社会を第三者的にふかんしながら気持ちを歌った歌です。例えば、『僕らは求めるものも　描いている未来も違うけれど　手と手を取り合えたなら　きっと笑い合える日が来るから　僕にはいま何できるかな』です。それを考えながらまちづくり、企業経営、経済運営、自治体運営をしていかないと、将来的に非常に厳しい状況が訪れます。YOASOBI は、非常に暗い曲が多いですが、『ツバメ』は歌詞も含めて非常にいい曲なので、ぜひ聴いてみてください。

環境の話から始めます。私は、環境の専門家ではありませんが、この絵は気候変動の影響、温暖化ガスの排出量の関係について見たものです。左は温室効果ガスが適度な場合、右は温室効果ガスが濃くなってしまった場合を表しています。温室効果ガスが適度に排出されているときは、宇宙への熱の放出がそれなりにあって、地球に戻ってくる熱とうまくバランスを取っています。太陽光が入ってきますが、基本的に地球が安定した状態です。平均気温は 15 度です。温室効果ガスが濃くなってしまったときは、反射をして、地球に戻ってくる熱の量が増えるので、宇宙へ放出される熱が少なくなります。温暖化がどんどん進んで、夏は暑く、冬は寒いです。台風やハリケーン等の自然災害、地震も激甚化をする方向に行きがちです。

これは気候変動、気候危機ともいわれていますが、年平均気温のトレンド線を表しています。上がったり下がったりしていますが、これをならしたものが青色の折れ線です。毎年の変動はありますが、5 年ぐらいで平均し、移動平均でならしながら傾向を見ています。1900 年から 100 年単位で見ていくと、日本の年平均気温は確実に上がってきています。各年で急に上がったり下がったりするよりは、上下をしながらじわじわと傾向が変わっています。経済活動が活発であることが全ての影響ではありませんが、要因の一つとして、国内での温室効果ガスの排出なども影響していると言えます。

経済活動が活発になると、CO2 の排出量も増えます。自動車など、輸送に関するものも CO2 の排出に貢献してしまいます。例えば、バブル景気の 1990 年頃を見ると、経済活動が全てではありませんが、日本国内の平均気温も上がってしまっています。近年は、日本国内だけではなく、西の中国や東アジア諸国の成長も著しく、その辺の影響を受けている可能性もありますが、非常に高めの気温になっている状況です。経済活動が活発にならないと国民の生活は豊かになりません。その意味で、経済成長と CO2 を排出しない世界を両立していかなければならないのが現状の課題です。

世界各国が一枚岩かというと、違います。これは世界各国の GDP の推移を長期の時系列で見たものです。赤色がアメリカ、黒色が中国、青色が日本です。日本は、1990 年代後半あたりから上がったり下がったりしていますが、横ばいです。低成長といっていいですが、それほど大きく成長していません。中国は、2000 年代に入ってから急速に経済成長率が高まっています。アメリカは、常に右肩上がりです。アメリカと中国の二大消費国の経済成長率が非常に高いですが、アメリカも経済成長をしていかなければ大統領選に勝てません。中国に関しても共産党の一党独裁ではありますが、アメリカに追い付け追い越せの状況です。規模では追い付いていますが、1 人当たりの GDP で追い付きたいので、まだ成長をしたいわけです。

日本は、低成長でくすぶっています。それ以外の欧州各国はある程度、成熟しています。これからは高い成長がなくても価値観を変えて、生活の豊かさを享受していくような価値観の国もありますが、中東などの産油国、アフリカ、南米など、発展途上国や新興国といわれる国々は、先進国にまだ追い付いていない、豊かさを享受できていないと見ています。その意味では、SDGs と言って、ある程度のコントロールをしようとしても、私たちはもっと成長をしたい、豊かになりたいと考えている国々もあります。その中で、持続可能性を探っているので、非常に難しい命題を求められています。

これは世界の二酸化炭素の排出量を表しています。中国が全体の 3 割弱で、世界最大の CO2 排出量です。割と古いタイプの石炭火力が多く、世界の工場なので、多くの CO2 を排出しています。2 番目がアメリカで、約 15 パーセントです。次いでインド、ロシアで、日本は全体の 5 番目です。2050 年にカーボンニュートラルで、CO2 の排出量と吸収量をゼロにする目標を掲げている国がたくさん出てきています。二酸化炭素の排出量が多い国々は、大部分とは言いませんが、例えば中国やインド、ロシア、産油国、東南アジアの途上国は明確に合意をしていません。

これが 2050 年の CO2 の排出量をニュートラルにし、実質的な排出量をゼロにすることを表明している国々です。達成できるかは分かりませんが、それに対して同意をしている国々です。先進国、かつ成長が成熟しているというか、止まっているは言い過ぎですが、それなりに安定した成長率になってきている国々がほとんどです。日本も入っています。CO2 を最も排出している中国は入っていません。インドや東南アジアの大部分も入っていませんし、中東の産油国も入っていません。

この辺の国は、原油を生産しています。地下からお金が湧き出てくるようなイメージですが、カーボンニュートラルが進むと、経済の豊かさの条件が崩れてしまいます。一時的に原油相場は上がりますが、将来的に技術的なことがクリアされれば、原油はそれほど必要なくなります。CO2 排出の意味では、化石燃料をあまり使わないほうが貢献になるので、同意はしていません。従って、各国の総論としては賛成です。地球環境や世界経済が戦争もなく、安定した方向に進むことには賛成していますが、各論で自国のことが入ってくると納得しがたい地域、国もたくさんあります。オーストラリアも先進国といえますが、資源国で石炭や鉄鉱石等が出るので、同意国に入っていないのが非常に特徴的です。

これはカーボンニュートラルのイメージです。左が現状を表しています。現在は、CO2 を差し引きで相殺し、大量に排出しています。工場、車が走るときは化石燃料であれば排気ガスを排出していますし、家庭から出る CO2 もたくさんあります。それに対して、将来的には太陽光発電、風力や水力などの再生可能エネルギーに切り替えていきます。自動車も電気自動車、EV です。純粋な EV であれば、走行中は排気ガスを出しませんが、電気をどのようにつくるかの問題があります。太陽光と風力の絵が描いてありますが、例えば中国で使っているような石炭火力だと、電気を生産するときに CO2 が大量に出てしまうので、再生可能エネルギーとセットでないと純粋な EV は機能しません。

他にも緑化などを進めていき、CO2 の吸収量の範囲内で排出量を抑えて、相殺するとゼロになるのがカーボンニュートラルの世界です。現在、この方向を目指しています。その意味では、ガソリン車の内燃機関をつくっている企業、その部品を作っている企業、石炭火力や石油などを使っているような発電所だけの電力会社は、将来的に企業としての存在意義が問われます。持続可能性は、持続可能でない企業や国々を生み出します。SDGs でフィルターをかけて、きちんとふるいを通ったものだけが正当に評価される時代が訪れます。まちづくりでも同様の視点が重要です。

これは日本の 2050 年までのカーボンニュートラルの目標です。2050 年に CO2 の排出量の実質ゼロを目指すと菅元総理が明言しました。途中の目標が 2030 年で、13 年度比で立てています。世界の他の国は、大体が 2010 年比です。切りがいいから 10 年比が自然ですが、日本の場合は 13 年度比です。13 年度は、直近の CO2 排出量がピークになっていて、上がっている時期からの 46 パーセント削減なので、10 年の下がっている時期の 50 パーセントならもっと下になりますが、比較的緩やかです。これでも達成できるか分かりません。2030 年に菅さんが政治家であるかも分かりませんが、最も高い山と比べている点では、菅さんに限らず、政治としては少しお茶を濁す目標設定な気がします。

日本は、ガソリン車の自動車メーカーが圧倒的に強いです。トヨタもハイブリッドは、世界トップの技術力ですが、世界で脱ガソリン車が加速しています。純粋な EV は、トヨタも本格的に EV の研究開発に注力すると CM でも言っていますが、少し出遅れています。トヨタよりも日産のほうが進んでいるぐらいなので、その意味では国内の企業、トヨタなどの自動車メーカーに配慮した目標設定なのかもしれません。世界各国は脱ガソリン車、脱化石燃料をしていこうとしていて、およそ 2030 年代半ばまでにガソリン車の販売を全面禁止することを表明している国が多いです。ガソリン車は、走行時の CO2 の排出量が非常に多いので、方向性としては妥当です。

この辺も自国の環境面はさることながら、自国の自動車メーカーの利益優先というか、ガソリン車を売れなくした後、売れる環境対応車の中にハイブリッド車を入れていない国がほとんどです。イギリスも同様です。フランスは非公表ですが、欧州はハイブリッドを入れない国が割と多いです。アメリカのカリフォルニア州でもハイブリッドを含むガソリン車の販売は禁止にする方針ですが、テスラの膝元なので納得です。日本は、携帯電話と一緒でガラパゴスにして、他の国よりはガソリン車への影響の猶予期間を少し長くした上で、ハイブリッドは含めるでしょう。中国は、日本との合弁企業も多いので、ハイブリッド車に対しては比較的許容するというか、自国の資本も入っています。

最も厳しいのは、ノルウェーです。2025 年までにハイブリッドを含むガソリン車の販売を禁止し、電動化で最も先行します。これはなぜかというと、ノルウェーは海から切り立った陸というか、崖にあるので、水力発電だけで国内の電力使用量を全て賄える国だからです。北海油田の権益も少し持っていて、北海油田などは輸出しているので、再生可能エネルギーで発電し、全て EV にすれば国内の排出量は、非常に少なくなります。世界でトップを走っている国です。

これはトヨタが本格的に EV に参入することを表明する前の格付けです。テスラが B プラスで、トヨタは D マイナスです。イギリスのシンクタンクなので英米寄りではありますが、ガソリン車とハイブリッドに対しては、風当たりが少し強くなってきています。EV やプラグインハイブリッド等がありますが、時間がないので飛ばします。これは Well to Wheel といって、基本的に油田から実際に走行するまでのトータルの温室効果ガスの排出量、CO2 の排出量をきちんと計算しなければなりません。単純なガソリン車は完全になくなりますが、例えば発電所での排出量をアンモニアの使用で抑えるような効果が出る技術が出てくれば、ハイブリッドも検討に値するのかもしれません。

これはガソリン車を 100 とした場合の排出量で、日本国内はハイブリッド車が 69 です。赤い部分が燃料を車のタンクに入れるまでの CO2 排出量で、緑の部分が CO2 単体の排出量を表しています。現状のガソリン車を 100 とした場合、ハイブリッド車で半分ぐらいには抑えられています。下は、全て EV ですが、同じ EV でも発電所のタイプによって全く違います。インドや中国のように発電の際の CO2 排出量が非常に多い国は、例えばインドで EV を走らせても発電のときに排出しているので、現状の日本のガソリン車を 100 とした場合、73 ぐらいにとどまっています。中国も 62 です。

ノルウェーは 1 ですが、ノルウェーのように水力発電や風力発電、太陽光だけで国内の発電量を賄える国は低いです。フランスも少なく、これは原子力発電所です。日本が本当に 2050 年にカーボンニュートラルになるならば、水力はつくれる場所が少ないので、太陽光と洋上風力、小型の原子力発電なども議論をしていかないと真面目に考えて、非常に厳しい気がします。これは愛知県の温室効果ガスの排出量を表していて、左のグラフが愛知県内の温室効果ガスの排出量です。メタンガスも少しありますが、CO2 排出量が 95 パーセントです。ランキングは入れていませんが、全国トップが千葉県です。2 番目が愛知県、3 番目が東京、4 番目が神奈川の順番です。

人口密集地域の東京と神奈川は、家庭部門の排出量が多いです。千葉の沿岸部には石油精製、発電所、鉄鋼などの工場がありますが、千葉や愛知のような産業部門の排出量が多い地域がワンツーです。真ん中のグラフは、愛知県の部門別排出量の構成比を表しています。青色が産業部門、赤色が業務部門、水色が家庭部門、黄色が運輸部門です。愛知県は、半分以上が産業部門です。生産したものを輸送する際に運輸も関係するので、業務部門も大手メーカーに付随して、非常に多くが産業部門に関連しています。家庭部門は、1 割を切っています。全国平均では、首都圏や近畿圏、各地方も入っていますが、産業部門が全体の 3 分の 1 を占めています。

その意味で、将来的に規制強化によって、工場をつくるときにカーボンニュートラルを実現するような工場ではないと新設できないような時代もくるかもしれません。尾張旭市は、森林公園があり、緑もありますが、域内で排出量と吸収量の差がどのぐらいあるかを判断基準として、若い人たちが定住や移住を決めるようになる時代が 10 年先か 20 年先にはくるでしょう。愛知県の課題としては、これまで自動車産業は豊かさのために非常に貢献してきましたが、CO2 排出量の観点でいうと、県内に工場を新設するのが難しい時代が訪れます。

車産業としては、自動車だけではなくというか、自動車を保有している世界の国々に対して、CO2 排出量の削減にどのぐらい貢献したのかを技術の裏付けとともに、内外にアピールしていく必要があります。例えば、製造業の組み立て、自社メーカー、発電や電気の使用など、企業の本業だけではありません。川上の上流である原材料や燃料、輸送、社員が通勤するときの CO2 の排出量から、川下の製品を実際に使うときの排出量、循環できればいいですが、廃棄した場合の排出量の全てをサプライチェーン全体で考えていく考え方に変わっていきます。

ここからは人口面の話です。これまで環境と CO2 排出量の関係で見てきましたが、人口減社会での持続可能性について見ていきます。この図は、日本創成会議が公表した消滅可能性都市にもつながる話ですが、2010 年を 100 とした場合の 2050 年の人口増減状況です。2050 年に 50 パーセント以上減少するエリアを青色、増加しているエリアを赤色、横ばいから 50 パーセント未満の減少にとどまるエリアを黄色で示しています。尾張旭市は、2040 年で 15 パーセントのマイナスの見通しです。2050 年まで引っ張っても 17～18 パーセントのマイナスで、黄色のエリアです。

私の出身地である八戸の辺りは、青色ばかりです。基本的には、人口集中地域のエリア内であり、コ

ンパクトシティで全体のエネルギーもコントロールしながらできる都市だけが残っていきます。これは尾張旭市の将来推計人口です。2045 年には、1 万 2000 人減少し、15 パーセント減です。人口が増える地域は、日本全国でもうほとんどありません。周辺に長久手市や日進市など、割と好調な市もあるので、15 パーセントも減るのかと驚くかもしれませんが、2045 年なのでまだ非常にいいほうです。

ベッドタウンとしてファミリー層を吸引と書いてありますが、右にある就業者や通学者の流出入人口を見てもらうと、昼間人口としては栄へのアクセス性が高いので、名古屋中区は 3300 人以上の流出超過です。尾張旭市のような自然も豊かで、地価のバランスもよく、住みやすい地域を選択するような若いファミリー層も現状では来ています。守山区も 600 人ほどの流出超過です。現状は、比較的いいほうですが、名東区や絶好調の長久手市など、条件がより良くて、住みやすいと評価をされている町との比較でいうと、やや劣勢気味です。

今後のまちづくりについてです。この後、各分野の専門家の先生がたによるパネルディスカッション、芸術大学の学生さんのまちづくりに関する提案もあるようですが、コンパクト化をしていき、周辺地域をネットワーク化していくことが非常に重要です。現状は、さまざまな中枢拠点の周辺に住宅地があって、その周辺に大型の商業施設があるようなバランスの比較的いい状況ですが、人口減少で高齢者世帯等が抜けていくと、虫食い状態になり、町全体としての体をなさない状態になる恐れがあります。財政的に余力があるうちに拠点を集約化しつつ、周辺の地域とネットワーク化をする必要があります。

将来的には、マイカーをなるべく減らせるようにコミュニティバスが頻繁に通る、スマートフォンで呼んだら車が来るなどの状況になる時代も訪れるはずです。そのまちづくりを進めて、各拠点をネットワークでつないでいくことになっていきます。コンパクトシティのメリットとしては、都市経営の上で財政的な面、効率がいいことです。愛知県内はまだ大丈夫ですが、岐阜県の北部や三重県の紀伊半島などの中山間地域、半島先端部は、いずれ行政サービスを画一的に定額で提供をすることが難しくなります。最小限のコストで、効率性の高い状態をつくり上げなければ、なかなか成立しない時代がきます。

シニア層や子育て世帯などに対して、町の利便性もキープできます。環境に関してもコンパクトシティの中でエネルギーを管理し、効率的に利用していくが不可欠になります。中山間地域のように離れた地域は、自然災害が激甚化をしたときにすぐに救出へ行けないなどのデメリットが出てくるので、防災面も非常に重要です。尾張旭市の場合は、串と団子型のコンパクトシティがいい気がします。徒歩圏を団子として、そぞろ歩けるようなまちづくりを進めながら、それをネットワークの串で結びます。名古屋との関係性でいうと、多極ネットワーク型も考えられます。

串と団子型のまちづくりを進めつつ、多極ネットワーク型です。名古屋駅は、2030 年頃にはリニアで品川と 40 分でつながるので、栄や名古屋駅へのアクセス性をさらに高めて、その先の首都圏マーケット、海外のマーケットも含めて想定していかなければなりません。交流の活発化や拠点のコンパクト化、にぎわいを創出し、健康寿命を延ばすことも重要です。交流は、域内の住民の方だけではなく、名古屋などの域外の若い人たちとの関係性を重視し、関係人口をつくることも必要です。

デジタル化の中では、テレワークを中心とした在宅勤務が広がっていきます。最近、首都圏の若い人は、東京で働き続けて、高い住宅ローンを払い切るためだけに生きている生活感を否定し始めているので、地方に移住する方が増えています。昨年は、東京都で初めて転出超過になりました。在宅勤務、ワーケーションといってバケーションのような形で沖縄や北海道等でモバイルワークをする、サテライトオフィスで仕事をするなど、物理的に出社する必要性が減ってきます。製造業等の生産現場では難しいですが、将来的に工場も無人で遠隔監視をして、何かあったときだけ人間が行くような状況に変わりま

す。

場所や時間にとらわれなくなると、名古屋から1時間圏内のエリアも注目される可能性が非常に高まります。コロナ禍でテレワークの実施率が高まり、特に東京圏と23区の20代の方に聞くと、地方移住への関心が高まっています。これとは別に男女別、年齢別のものを見ると、20代の男性は地方移住への関心が高いです。女性の場合は、大都市圏の近接性を重視する傾向が出ています。その意味では、男女比のバランスが良くなければ将来人口も増えていかないので、女性に優しいまちづくりの視点は非常に重要です。尾張旭市でもサテライトオフィス、在宅勤務に対するバックアップも考えていかなければなりません。

資源や環境、食に関しては、効率性だけではなく、持続可能性を追求していくと、どうしても物価は高くなります。物をなるべく買わずに循環させるようなエコバッグ、脱プラスチックのプラスチック資源循環促進法も施行されます。CoCo壱番屋では、大豆ミートを使用したフライ等のトッピングもあります。肉に関していうと、牛のゲップがメタンガスを大量に含んでいます。大豆も不安定になる時期がありますが、将来的には植物工場で安定的に生産をするとなると、自然のものよりは少し高くなります。人件費も高くなります。

貧困や飢餓をなくす意味では、フェアトレードでアフリカのコーヒー豆、カカオ等を高い値段で買います。さまざまな面に目配りしていくと、どうしてもコストが高くなります。それを許容できて、消費も含めて、なるべくコンパクトなまちづくりを進めていくと、若い人たちも尾張旭市の姿勢に共感し、移住や定住をしてくれるはずです。将来を支えてくれる町のまま30年後、50年後、100年後まで続いていくでしょう。最後は駆け足になりましたが、ちょうど時間がきたので、私からの話を終わります。ご清聴ありがとうございました。

司会　内田先生、ありがとうございました。SDGsの話から始まって、世界的な環境、エネルギーの問題、人口、経済など、まちづくりをキーワードに身近な視点、世界を見る視点という多くの視点が必要であることを興味深く聞かせてもらいました。個人的には、YOASOBIの歌詞がそれほど深いものであると知って、内田先生がYOASOBIの曲を歌う声を聞いてみたくなりました。

内田　私は真面目なので、よあそびはしてこなかったです。

司会　本当に魅力的な話を聞かせてもらいました。内田先生が退席されます。大きな拍手をお送りください。ありがとうございました。

第2部　まちづくりの提案発表

司会　第2部のまちづくりの提案発表に移ります。愛知県立芸術大学美術学部の皆さんが登壇します。皆さん、拍手でお迎えください。愛知県立芸術大学の水津功教授、美術学部2年の松永祥太朗さん、内海凜香さん、浅貝宇乃さんです。皆さんは、まちづくりのデザインの授業でプロジェクト課題に参加されました。尾張旭市内を実際に自身で訪れ、現地を歩いて、地元の方に話を聞くなどの活動をされたそうです。皆さん、発表をお願いします。

水津　皆さん、こんにちは。愛知芸術大学の水津です。愛知芸術大学は、尾張旭市と協定を結び、ちょ

うど隣の三郷駅前の開発デザインを少し手伝わせてもらっています。彼らは、昨年の夏頃に三郷駅前の調査をして、そこで分かったことに対する提案をまとめました。三郷駅前の周辺が対象でしたが、中を開けてみると、尾張市全体に関わるような問題が多かったので、この場で発表をさせてもらうことになりました。よろしくお願いします。

松永　愛知県立芸術大学2年生の松永祥太朗です。よろしくお願いします。水津教授から説明があったように、実際に三郷周辺を数回ほど歩いて、自分の目で見て回り、問題点を発見するのが私たちの課題でした。その中で、私が目を付けたのは渋滞問題です。実際に歩いてみて、三郷駅から矢田川にかけて、この町は非常に渋滞しています。いつ行っても、朝は混雑しているのが目に付いた特徴です。その辺は、私よりも住んでいる皆さんのほうが体感している問題かもしれません。矢田川にかけて、東南の移動に関しても渋滞しています。あの場所は、定期的に駅の前後に踏み切りがあるので、それに引っ掛かり、長い渋滞が起きています。

渋滞問題は、現在に始まったことではありません。これまでどのようなことがされてきたかをリサーチすると、60年近く前の1964年から問題があって、三郷駅前や印場、尾張旭駅前の整備を市が定期的に行っていました。これからどうしていくかについては、ホームページ等で調べてもらえれば出てきますが、三郷駅前線を廃止する、高度利用地区の決定などです。昔は、高架をかける計画等がありましたが、なかなかうまくいかなかったようです。これらの計画は、この場では言いづらいですが、あまりうまくいかないのが本音です。実際に整備が行われてきましたが、現在でも渋滞問題はずっと残っています。

デザインのものの見方として、視点を変換して、提案をさせてもらいます。道路を整備する中で、これまでは渋滞をいかになくすかを考えてきましたが、渋滞の価値を見いだすことに目を付けました。どういうことかというと、迂回ルートを通ると、道に応じてポイントがもらえる仕組みです。渋滞はストレスなので、ストレスをなくしていくような提案をします。どういうことかというと、渋滞を避けて、避けたのに応じてポイントがたまり、それを買い物で使えるようにする非常にシンプルな3段構造です。一つずつ説明をします。

これはカーナビのアプリケーションですが、さまざまなルートを予想して、混雑状況を教えてくれます。従来のアプリケーションと同じですが、違う点は、ポイントがたまることです。どういうことかというと、そのまま直進して、最短の20分で着くルートを使うと、3ポイントしかたまりません。これまであったTポイントや楽天ポイントのようにポイントがたまっていきます。少し長い道で、25分かかる迂回ルートを使うと、7ポイントあげます。ポイントで誘導し、分散をして、渋滞を少しずつ減らしていく提案です。たまったポイントは、三郷町などで5パーセントオフクーポンや商品の引換券として、地元で使用できます。

概要として、カーナビのアプリケーションのイメージ画像を載せています。迂回ルートを調べて、ポイントがたまり、それで買い物をしてもらいます。この提案は、車の運転手にメリットがあるのはもちろんですが、町自体にもメリットがあります。これまで渋滞を起こすだけだったドライバー、町を通り過ぎていくだけだった人たちがポイントやサービス制度によって、町を通るときに買い物をしてくれます。町にお金を落としてくれるので、町の盛り上がりや復興などのサービスにつなげられます。これはアプリケーションのロゴです。IMS、イームスと名前を付けました。ネーミングは頭文字から取っていて、Isogaba Maware Sistem でIMSです。私の発表は以上です。ご清聴ありがとうございました。

内海　こんにちは。愛知県立芸術大学 2 年生の内海凜香です。よろしくお願いします。私は、『愛知用水が灯す明るい散歩道』の提案をします。三郷駅前周辺の特徴を見てみると、高齢者が増加をしていること、道が狭いことです。高齢者の方が健康に暮らしていける、道が狭いことで起こる渋滞を緩和できるようにするにはどうすればいいかを考えると、歩いて暮らすことがキーワードになりました。歩いて暮らすことで、健康や渋滞の緩和にいい影響を与えます。その中で、なりたい未来を歩きたくなる町、三郷と設定しました。歩きたくなるのはどういう所かを探るために、水のある所に人は集まると仮説を立てました。

実際に尾張旭市内の散歩スポットを見て、そこから学びました。地図で水のある所を見てみると、実際にいくつかスポットがあり、そこを探索することにしました。森林公園は、川や木があり、広い空間があります。お年寄りだけではなく、家族連れで来ている方も多く、伸び伸びと体を動かすのに適した場所です。矢田川は、河川敷になっていて、朝や夕方はウォーキングに来るお年寄りの方も多く、散歩に最適な場所です。城山公園は、大きな池があり、周りを歩いている方や公園内にある健康器具を使い、体を動かしているお年寄りの方の姿を見ました。

濁池は、住宅を囲むように池があり、散歩ができるように一部、道がつくられていました。屋根がかかった休憩できる場所もあって、散歩に適した場所です。三郷駅の近くにも散歩スポットがあって、旭境川です。ここは川沿いに木がたくさん植えられていて、実際に夕方に行ってみると、犬を連れている方や夫婦で散歩をしている方も見られました。椅子や机が置いてあって、散歩している途中に休憩できるスポットもあり、町の皆さんが散歩スポットとして利用していることが分かりました。

尾張旭市内には散歩スポットがあることが分かりましたが、三郷はどうなのかと地図で見てみると、三郷駅周辺にも水のある場所を発見しました。地図で見ると、公園と公園をつなぐように水が流れている場所で、面白い地形です。実際に行ってみると、これまで尾張旭市内で見た散歩スポットとは雰囲気が少し違って、危険の文字が目立っていて、無機質な雰囲気でした。危険と書かれた看板や高いフェンスがあります。この川について調べてみると、愛知用水であることが分かりました。これは工業用、農業用、水道用として岐阜県の八百津町から知多郡の美浜町までずっと流れている用水です。

この愛知用水は、危険の文字が目立ちますが、実際に行ってみると散歩をしている人、通学路として小学生が歩いていました。歩いている方に話を聞いてみたときに、赤ちゃんを連れたお母さんが「歩道があるから、ここが一番安全な道です」と言っていたことが特に印象に残りました。三郷駅周辺の中では広い道が確保されていますが、危険の文字が目立っているので、本当に安全な道なのか疑問に思い、管理をしている方に聞いてみました。これまで事故が起きているかと聞くと、実際に事故は起きていて、穏やかに見えても水量が多く、流れも速いそうです。

水路脇の道は歩行してもいい道なのかと聞くと、かつては通行禁止でしたが、公衆用通路として歩行者も利用できるように変わったと言っていました。安全に利用してもらえるようにフェンスや危険と書かれた看板があることが分かりました。それを分かった上で、もっと歩きたくなるとともに、安全を守りながら町のためになるように愛知用水を活用することを提案します。提案は、『愛知用水が灯す明るい散歩道』です。安全を守った上で、歩きたくなるような町や道をつくることで、フェンスでもあり、街頭でもあるものを用水路沿いにつくります。

街頭で明るい道をつくり、景観も良く、歩きたくなる道をつくりたいです。尾張旭市内を探索している中で、ガス灯のような少しレトロな街頭を発見しました。この街頭を並べたいです。愛知用水を生か

すために水流を生かし、小電力発電で街頭をともしたいと考えています。明るい散歩道ができることで、歩きたいと思ってもらいたいです。それによって、町の人が歩いて出掛けたくなり、健康にもつながります。歩きたいという気持ちは、渋滞の緩和にもつながるかもしれません。私の提案は以上です。ご清聴ありがとうございました。

浅貝　愛知県立芸術大学 2 年生の浅貝宇乃です。よろしくお願いします。私は、『三郷の皆の食卓を』をテーマに発表します。本提案のきっかけは、三郷の住民の方にヒアリング調査を行ったときに、子育て世帯の方から「きょうは夕飯が準備できないから、夫にどこかで食べて帰ってきてほしいと言っても食べて帰ってくる所がない」という意見が出ました。それを聞いて、三郷周辺には飲食店がないのではないかと疑問が発生したからです。実際に三郷駅周辺を訪れ、調査をしてみると、居酒や焼き肉、喫茶店、ファストフードなど、三郷駅に飲食店があることが分かりました。

実際に食べて帰る所がないという意見が出た以上、現在、三郷にある飲食店では補えないニーズが存在しているのかもしれないと考えました。そこで三郷駅周辺の飲食店を分析し、次のような図にまとめました。縦軸が手軽さ、横軸が価格などの特別さの表になっています。調査をした結果、日常的、かつきちんと食べたいときに利用したい店を A タイプとし、ここではしっかり日常系と名前を付けました。その飲食店が三郷には不足をしていることが分かりました。

なぜ三郷には、しっかり日常系の飲食店がないのでしょうか。例えば、名古屋駅周辺のような都市部には、定食などのしっかり日常系の飲食店が多く存在しています。名古屋駅周辺と三郷は何が違うのかというと、三郷は名古屋駅周辺より住宅が多いです。家でご飯を食べるので、家で食べられるご飯に近いものを提供する飲食店の需要が少ないのではないかと考えましたが、実際のヒアリング調査の結果では、しっかり日常を求める意見が挙がっています。しっかり日常系の飲食店にも隠れた需要はあるのではないでしょうか。

どのような人が三郷でしっかり日常系の飲食店を必要としているのかを考えると、家でご飯を用意するのに問題があるような共働きの方、単身者の方、高齢者の方だと結論が出ました。このかたがたは、今後の日本や三郷町でも増えていきます。現在は、三郷でしっかり日常系の飲食店の需要は少ないですが、今後はどんどん大きくなっていくでしょう。そこで提案をするのは、まちそだて食堂いっときです。これは住民が気軽に使用できるシェアキッチンのサービスおよび店の名前です。

例えば、カレーを作るのが趣味の一般の方、お店を開きたいが、ハードルが高いと諦めている方に曜日制で場所とキッチン、売り場を提供することで、作った料理を気軽に販売できるサービスです。いっときは、店名であると同時にシステムの名前でもあります。このお店は、曜日ごとに内容が変わります。例えば、月曜日はカレー屋、火曜日はケーキ屋、水曜日はドーナツ屋と変わっていくようなテークアウト中心の料理屋です。この名前の由来は、料理を食べにくる利用者の方にとって一時ずつ内容が変わる、食事の一時を皆で共有するような意味で名付けました。

なぜシェアキッチンのシステムを取ったかというと現在、三郷ではしっかり日常系の需要がまだ少ない中で、三郷周辺の印場で飲食店をしている方にインタビューをしたときに、三郷の駅前は飲食店ができてもすぐにつぶれてしまうことが問題として挙がりました。その状況の中で、町民が自ら支えて、運営をしていけるような飲食店のシステムが必要だと考えました。飲食店の経営に興味のある方、新しく挑戦したい方が気軽にスタートアップできるとともに、コミュニティーが生まれることによって、町民の方の新しい挑戦やつながりを生み、町を活性化させる目的もあります。

いっときの特徴としては、利用者の方が食材を持ち込めることです。出店をしない方も食材の寄付を通して、つながれることがメリットです。例えば、近隣で飲食店をしている方、畑を持っている方がいっときに材料を提供できます。しっかり日常系の飲食店を必要としている方にとっても、下の図のように月曜日は漬物とカレー、火曜日はパスタとドーナツなど、日替わりでさまざまなものが出店されることで、目新しさが失われません。この近くの人が出店をすることで、家庭的で温かいご飯が食べられるというしっかり日常系の需要も満たせる店になると考えます。

いっときを通して、食材が余っている人、孤独で誰かとのつながりを欲している人、料理の特技を生かしたい人など、三郷町の中でさまざまな世代の方がつながることで、三郷の地域の互助活動が活性化されていきます。三郷の町全体としても、しっかり日常系のニーズが満たせるとともに、町民同士のつながりも深まるため、行政を通して取り組んでいく提案にしたいです。いっときは、三郷の皆の食卓になれる提案だと考えています。以上です。ありがとうございます。

司会　皆さん、ありがとうございました。それぞれ 3 人の学生さんがすてきな提案をしてくれました。少し時間があるので、もう少し詳しく話を聞かせてもらいます。

松永さんから順番にお聞きします。三郷駅前の渋滞を解消するべく IMS というシステムですが、名前がすてきです。英語の難しいシステム名が出てくるかと思っていました。

松永　迂回を英語に直すなど、名前をどうしようかと検討していた中で、名前の重要性についてはデザインをしていて実感しています。あまり気取っても仕方がありませんし、それよりも親しみやすく、笑えるようななじみ深い名前にしようと考えた結果、Isogaba Maware Sistem にたどり着きました。

司会　Isogaba Maware Sistem は、1 回で覚えました。道路工事などで渋滞を緩和させるような取り組みは、どこでも行われてきていますが、それをポイント制にして、ストレスではなく、渋滞があったらラッキーぐらいのものにする発想は、どこから生まれてきたのでしょうか。

松永　最初は、道路に橋をかけるなどの方面で悩んでいましたが、実際に行われていても渋滞は解消していません。どうしようかと実際に歩いてみて、何が原因だろうかと少しずつ立ち返ってみました。

司会　現場で原因を深く探ることによって、何かひらめいた瞬間があったわけですか。

松永　はい。ドライバーの顔を見ると眉間にしわを寄せている方もいて、朝から大変そうだと感じながら着想を得ました。

司会　もし渋滞がいいものになれば、ドライバーも笑顔で運転ができます。それによって、交通の安全性も向上するかもしれません。Isogaba Maware Sistem という素晴らしい提案をありがとうございました。内海さんの提案は、愛知用水に着目し、歩いて暮らすです。話を聞いていると、現地の環境や要素、人について本当によく着目されていましたが、何回も足を運んだのでしょうか。

内海　はい。この授業が週に 1 回あって、毎回、調査報告ができるように半年間、毎週、通いました。

私自身は、県外の出身で、大学に来てから尾張旭市を知ったので、いろいろと知るために回りました。

司会　すごいのは、危険と書かれた看板です。危険と書いてあったら、普通は危険だとそのまま受け取りますが、そこを深く掘り下げて、危険といわれている場所の歩道が安全かまで導き出されていました。そこまで思いついたのは、なぜでしょうか。

内海　私自身は、愛知用水という無機質な景観に慣れず、新鮮な気持ちで何が危険なのかと疑問でした。話を聞いてみると、安全な道だと言われていて、そのギャップが非常に印象的でした。何が危険なのかを理解していれば、もっと安全にできると考えました。

司会　ありがとうございます。本当にすてきな提案でした。浅貝宇乃さんの提案もすてきなネーミングです。再度、教えてもらえますか。

浅貝　いっときです。

司会　コロナ禍があり、尾張旭市でも三郷でも、どこの町でも同様ですが、お店を立ち上げてもなかなか続かないような厳しい状況です。シェアキッチンのアイデアはすごいですが、どのようなきっかけで思い浮かんだのでしょうか。

浅貝　三郷周辺の飲食店は長続きしないという話を聞いたのはもちろんですし、三郷町全体で住民同士がコミュニケーションを取れるようなシステムが必要だと考えました。

司会　現状だけではなく、これから人口や世代の構成が変わっていくことも踏まえて、何年先、何十年先の尾張旭市の町を長い目で見た提案で、非常にすてきです。3 人の学生さんによるまちづくりの提案には、皆さんもわくわくしたのではないでしょうか。いかがでしたか。うなずいてくれている方、拍手をしてくれている方もいます。本当にすてきな提案をありがとうございました。愛知県立芸術大学の松永祥太朗さん、内海凜香さん、浅貝宇乃さんでした。皆さん、大きな拍手をお送りください。

第3部　パネルディスカッション

司会　第 3 部は、パネルディスカッションです。テーマは、『あさひの歩みから未来へ』です。先生がたが登壇されますので、拍手でお迎えください。コーディネーターは、名古屋産業大学現代ビジネス学部教授の伊藤雅一先生です。パネリストには、愛知県森林公園管理事業部長、名古屋大学名誉教授、農学博士の松本哲男先生、中部大学人文学部歴史地理学科教授の水野智之先生、愛知県立芸術大学美術学部教授の水津功先生をお迎えします。よろしくお願いします。ここからの進行は、コーディネーターの伊藤先生にお任せします。

伊藤　皆さん、こんにちは。第 3 部のパネルディスカッションのコーディネーターを務める、名古屋産業大学の伊藤です。よろしくお願いします。ここからは第 1 部の内田先生の基調講演、第 2 部の愛知県立芸術大学の学生さんによるまちづくりの提案発表を踏まえて、『あさひの歩みから未来へ』をテーマ

に尾張旭市の過去や現在、未来につながることをディスカッションしていきます。パネリストの皆さんに自己紹介をしてもらいます。パネリストの皆さんは、これまでや現在進行形で尾張旭市との関係を持っています。その関わり、尾張旭市の特徴や魅力、これからどのようなことに力を入れていけばいいかについて、自己紹介を含めて 10 分程度で話をしてもらいます。水津先生からよろしくお願いします。

水津　水津です。先ほどは、ありがとうございました。私と尾張旭市との関係は、2 年ほど住んだことがあり、一時だけ尾張旭市民でした。それが関係しているかは分かりませんが、最近は行政の手伝いをさせてもらっていて、都市計画やコンパクトシティ、三郷駅前のまち育てプロジェクト等で関わっています。本日は、既存資源を価値化する話、立地適正化計画がチャンスである話、町の資源を探査する話の 3 点について話をします。価値化できる資源には、さまざまなものがあります。私の経験を紹介させてもらいます。

私は､随分と長く碧南市と関わっています｡名古屋鉄道が 2.3 キロメートルほど廃線になりましたが、そこを公園にするプロジェクト、碧南レールパークに取り組みました。これはいったん廃れた土地を新しい都市の活力として再整備するプロジェクトで、一つの既存資源の価値化です。これは先ほど上り調子といわれていた長久手の話ですが、50 年前に大学のすぐ近くで三ヶ峯住宅の開発がありました。道路があって、住宅があり、森があるような開発を行って、本当に自然しかない所に自然に親しみたい人たちが移り住んでくるような町がつくられました。

それが最近、つくられた開発では逆になっていて、住宅があって、道路があり、森があるような形です。この場合、基本的に生活と森は切り離されていて、ここに住む方の多くは、別に自然がうんぬんではなく、安いから来る方が多いです。森から虫などが飛んでくると、全てリスクになり、市へのクレームになっています。自然と隣り合い、似たような事例ですが、全く対照的な住民と自然の関係が成立しています。森は、既存価値の資源ですが、これを価値と認識できるための形の差が大きいです。住民の幸福を増やす町は、どちらの形かを考える一つの事例です。

アイデアとしては、この下の例の場合、接している所を人と森のエコトーンと解釈し、森のエリアにも人が参加できるようなハンドリングにします。例えば、森林公園の場合でも周辺の住民が一部に関与し、メンテナンスに参加できるようなエリアをつくると、近隣に住んでいる人たちの価値が上がるようなアイデアにつながります。これは私がデザインをした、まきストーブです。先ほどカーボンニュートラルの話もありましたが、そこに管理材もさらに楽しみにつなげていくようなライフスタイルが張り付いてくることが連鎖反応として起きるでしょう。

立地適正化計画とは、コンパクトシティのことです。このぐらいいた住民が減っていきます。これまで都市を支えてきた人たちがこれだけ減って、同じサービスを提供するには 1 人当たりの負担が大き過ぎるので、もう少し小さくするのがコンパクトシティの考え方です。基本的に国の方策でも都市機能の集約化が注目されていますが、都市サービスが希薄化をしても、自然資源に近いことが価値だと考えている人たちがもっと自由に生活が満喫できるようになれば、コンパクトシティはトータルで生活の多様化にも貢献できるはずです。立地適正化は、都市機能の集約だけが注目されがちですが、多様な生活様式や多様な環境も豊かになるチャンスがあると捉えています。

資源の探査には、さまざまな方法があります。私は、碧南市で景観の資源探査を長いことしていましたが、最初はヒアリングで地域の人たちが何をいいと感じているかを集めて、共有する活動でした。パネルを作って、展覧会等をして、共有をしていましたが、イベントのように一過性で終わってしまいま

す。イベントに参加をしない人にも日常的に共有できる方法として、一定期間しか置けませんが、みずいろベンチを設置しました。これは『へきなん』の 2012 年 8 月号の表紙ですが、市民の誰かがここから見える景色が好きだと言った場所にベンチを置きますという触れ込みです。

このベンチは、ここの風景を誰かがいいと言っていることを示す記号として存在しているわけです。この方法で、現場に地域人たちの価値観を共有する装置をつくりました。随分と反響があって、碧南市で 2 年ほど行いました。その後もさまざまな地域から引き合いがあり、山口県の防府市や愛知県の西尾市でも行いました。北海道からも大型バスの観光から自転車にシフトするときに新しい景観資源を集める必要があり、みずいろベンチの方法で資源が集められるのではないかと依頼がきました。これはまだ実現していませんが、皆の意見を集約して、共有をする方法として注目されています。何か参考になるかもしれないので、紹介させてもらいました。以上です。

伊藤　ありがとうございました。水野先生、よろしくお願いします。

水野　よろしくお願いします。中部大学の水野智之です。『市域の歴史と文化の魅力　小牧・長久手の戦いなどから』と題し、話をさせてもらいます。私は、日本中世史を専攻していて、南北朝、室町時代の政治史を主に研究しています。京都を中心とした中央の政治史が専門ですが、愛知県史、安城市史、豊田市史、春日井市史など、多くの自治体史の刊行にも従事しています。図書館に足を運んでもらうと、地域の自治体史があり、各地域の歴史や文化がまとまっていますが、その本の刊行に携わってきました。

尾張旭市とのつながりとしては、2001 年から 2004 年度の文部科学省の科学研究費で、小牧・長久手の戦いの研究に関わりました。これは近世成立期の大規模戦争であり、ちょうどこの頃、関ヶ原の戦いをはじめ、各地で大きな戦争が行っていました。その共同研究として、小牧・長久手の戦いを取り上げました。皆さんは、小牧・長久手の戦いと聞いて、天下分け目の戦いであるイメージが乏しいかもしれません。一般的には、関ヶ原の戦いが天下分け目の戦いだと認識されている方が多いですが、全国各地で戦争が起きていた中で、小牧・長久手の戦いは何カ月も行われていたので、関ヶ原に匹敵するような本当に大きな戦争だったことが研究をして、分かりました。

その関係で現在、私は長久手市の文化財保護審議会の委員、古戦場公園の整備などにも従事しています。尾張旭市域の歴史として有名な出来事は、小牧・長久手の戦いにおける白山林の戦いではないかという観点の検討が市で行われたので、招いてもらいました。私は、名古屋市守山区に住んでいます。先ほどお店の話もありましたが、飲食などでよくお世話になることもあり、なじみが深いです。尾張旭市域の歴史と文化、魅力の提言として、本日もいくつか手元に置いていますが、『尾張旭市誌』に非常に多くまとめられています。

印場および稲葉、三郷地域などに条里制の遺構、式内社の存在が残っています。聖なる白山といって、稲葉の南部丘陵地域に市域最古の族長の墳墓の存在があります。これは祭祀の場であった可能性があり、非常に聖なる場所だったのではないかといわれています。水野良春は、南北朝期の武将です。その銅像が尾張旭駅前にあります。知名度はあまり高くないとも聞きますが、歴史上の人物も評価されています。小牧・長久手の戦い、白山林の戦いは、徳川家康側が勝利をしたことで知られていますが、同時代史料では、白山林の戦いの戦いなどはあまり出てきません。あまり知られていませんが、江戸時代を通じて、この戦いが注目されています。

名古屋と瀬戸の中間地域でもあります。瀬戸街道は、交通路として重要性があり、両地域に影響を持

っています。今日の名古屋鉄道瀬戸線にもつながっています。多くの重要な歴史上の特色は、『尾張旭市誌』の刊行によって、いろいろと指摘をされています。1971 年の刊行で、現在から 50 年近くたっているので、その後の研究によって進んだ部分、現在はどのように議論をされているかが明らかにできていければいいです。尾張旭市には、ふるさとガイド旭様の長年の活動、研究があります。これは 17 号ですが、『ひまわり』の中で多くの研究の成果が発表されています。本当に貴重な活動です。

魅力をさらに高めるには、調査、研究を活性化し、その成果を多くの方に知ってもらうこと、成果をまちづくりに生かすことが重要です。調査、研究活動とは、地域の歴史や文化の価値を見いだすことです。それは価値を創出することを意味します。成果があまり知られていないなら、今後は市域の方が感じる魅力を高める余地が多いわけです。参加者の皆さんがもし歴史的なことが思い浮かばないなら再発見できる余地はたくさんあります。『尾張旭市誌』が刊行されてから 50 年以上がたっていて、研究が進んでいます。歴史学、民俗学、地理学等による総合的な研究が盛んに行われています。

研究を進めるためには、古地図や古文書の読解、史料の批判や分析、荘園や村落の土地利用、城下町や門前町の構造、河川の流れ、自然堤防の状況などを調べて、さまざまなことを組み合わせながら考えていきます。若い世代の地域への関心を高めるために、例えばふるさとガイド旭様と中部大学の学生による共同のフィールド調査、年配の方への聞き取り調査などを実施しています。先ほども学生さんから報告がありましたが、中部大学では、私も歴史学の分野の先生に知り合いが多いので、近隣の大学の関係者と一緒に共同研究をすることで、若い人たちも新たな価値や魅力が分かってくると考えています。

何かあれば、また後ほど補足をさせてもらいます。私からは以上です。

伊藤　ありがとうございました。松本先生、よろしくお願いします。

松本　皆さん、こんにちは。松本哲男です。私は、1947 年 3 月 1 日生まれで、もうすぐ 75 歳になる団塊世代の 1 人です。名古屋大学で博士号を得た後、インドのハイデラバードにある国際研究機関国際半乾燥熱帯作物研究所、アメリカのミズーリ大学で豆の窒素固定の研究に従事していました。1984 年にアメリカの多国籍企業の日本支社、ダウ・ケミカル日本株式会社に入社した後、アメリカ本社に移り、グローバルアドバイザー、アジア・太平洋研究開発部長としてインド、アジア、太平洋 10 カ国の研究チームを統括してきました。

その縁で、1999 年に名古屋大学に新設された農学国際教育協力研究センターの教授に招請され、アジアとアフリカを中心に発展途上国の農業開発の研究に携わってきました。特にカンボジアの農村開発では、ポル・ポト政権によって途絶えてしまった伝統的焼酎造りの復活に力を注ぎ、カンボジア一の品質の焼酎として、飛行場で販売できるところまで持っていきました。私は、日本の大学の教授としては珍しく、趣味でゴルフをしています。大学の先生がゴルフをしていると、あいつは駄目な教授だといわれますが、私は民間にいたので、ゴルフが大好きです。

森林公園のゴルフ場にプレーに来ると、その荒れように非常にびっくりしました。芝ははげだらけで、草は茂っていて、キャディーさんの態度も最悪です。この名古屋市中心部から 45 分のゴルフ場が赤字だと聞いて、絶対に経営が間違っていると感じました。これがきっかけで、2004 年に愛知県が募集した民間資金を活用した PFI 方式の事業に森林公園ゴルフ場の再整備、運営を目的に応募をしました。友人の会社で、私の現所属先であるウッドフレンズを誘って、里山との共生をキーワードに応募をして、幸いにも受託できました。

当時、里山と共生するゴルフ場は、日本に1軒もありませんでした。これが尾張旭市と私の本格的な接点の始まりです。当時の私は、国立大学の教授だったので、ゴルフ場の経営に携わるとは夢にも考えていませんでしたが、退職後の 2010 年 6 月にウッドフレンズより取締役を頼まれました。植物学者として、私は森林公園の貴重植物保全に強い関心があったので、翌年の森林公園管理運営の公募に応募させてもらうことを条件に取締役を引き受けました。これも無事に愛知県より受託に成功し、現在の森林公園の統括責任者に立っています。

この間、尾張旭市とは、あさひ健康マイスターへの参加、冬のジョギング大会、こども会のデイキャンプ、あさぴースマイルウオーキングなどの開催で連携をさせてもらっています。今後、よりいっそうの連携を深めたいと考えています。個人的には、2016 年から 2019 年まで尾張旭市環境審議会委員を務めていました。2017 年には、まちづくりについて金城学院大学と尾張旭市の連携の橋渡しをさせてもらいました。尾張旭市の特徴について、SWOT 分析をしました。尾張旭市の強みは、これまで他の演者の方からも指摘があったように、名古屋市中心部へのアクセスが非常にいい、公園や緑地などに恵まれた自然環境、健康への取り組みの充実、住みやすい居住環境です。

弱みとしては、三郷と尾張旭駅周辺の渋滞、第 1 次産業、第 2 次産業の衰退と停滞、自然環境の減少、日進市や長久手などの他の近郊都市に比べて、知名度が劣っていることです。機会としては、昨年末に発表されましたが、政府による IT 産業振興の政策、コンパクトシティの推進が挙げられています。地理的には、矢田川周辺を除くと、尾張旭市は洪積世土壌という比較的強固な地層の上にあります。これはなぜいいかというと、巨大地震が来たときに名古屋駅は水没化します。それと同時に、同じリニアの発信地である品川も水没するでしょう。名古屋市の中川運河から西側は、洪積世土壌なので全く使い物にならなくなります。そのときに東山の三陸層のあるこの辺りは、代替として活躍できます。

脅威としては、人口減少により他都市との人の奪い合いが起こる可能性があります。産業構造については、第 1 次、第 2 次と同様に第 3 次産業の構造も停滞しています。情報通信業の会社もさほど伸びていません。一般論として、温暖化による災害多発も考えられます。尾張旭市の将来を考えるときは、快適な居住と働きやすい環境をいかにつくり上げるかにかかっています。先ほども話がありましたが、人口減少を前提にしたまちづくりが重要です。人口の将来予想としては、尾張旭市は 2020 年の時点で 8 万 2600 人の人口ですが、2060 年には約 20 パーセント減って、6 万 6330 人になるでしょう。市の目標では、何とか 7 万 9000 人レベルにとどめたいようですが、私から見れば 7 万人が現実的です。

その中で、どのように将来のまちづくりをするかについては、先ほどから何度も出ているように、コンパクトシティ構想の導入を提案します。駅周辺にマンションなどの集合住宅、近郊に一戸建ての住宅、駅前のロータリーや駐車場を整備します。特に三郷駅周辺の整備については、急がなければなりません。これはまた時間があるときに説明をします。あさぴー号を近郊と瀬戸線の 4 駅、藤が丘駅に直結するような魚の骨格路線をつくる必要があります。

働きやすい環境の構築ついては、昨年の 12 月 28 日に政府からデジタル田園都市国家構想が発表されました。これは読んでみると、まさに尾張旭市のための構想だと感じています。最初に地域の暮らし、社会、教育、研究開発、産業、経済をデジタル基盤の力により変革し、大都市の利便性と地域の豊かさを融合したデジタル田園都市を構築して、心豊かな暮らし、ウェルビーイングと持続可能な環境、社会、経済、サステナビリティーを実現すると政府はうたっています。その中身はどうかというと、全くありません。全て抽象的です。これは先に手を挙げた都市が勝ちです。計画をじっくり立てる前に、尾張旭市は走りながら手を挙げたほうがいいでしょう。

尾張旭市には、看護学校の跡地と消防学校の跡地があります。その未活用の土地の整備をして、企業や個人を誘致し、デジタル田園都市を築く必要があります。この中で特に強調されているのは、市の中核として大学を取り込むことです。名古屋産業大学をはじめ、中部大学、県立芸術大学、隣の町にある金城学院大学に IT のカリキュラムを組んでもらえると本当にありがたいです。これは政府のポンチ絵で、デジタル田園都市構想会議が作成をしました。何を訴えたいのかがなかなか理解できませんが、産業の変革、知の変革、暮らしの変革とあり、スマートヘルスケアとあります。全て抽象的ですが、とにかくグリーンです。ここがグリーンに塗ってありますが、まさに尾張旭市にぴったりです。

最後になりますが、尾張旭市は健康都市の推進をしている町です。私は、健康の駅の設置を提案します。主な地域に手軽な運動施設、1 カ所に集約した施設を設置してもらいたいです。主要公共施設に手頃な健康診断機器を設置し、皆さんが気軽に自分の健康状態をチェックできるといいでしょう。4 月のあさひ健康フェスタ、6 月の市民体育大会、1 月のジョギング大会などが行われていますが、さらに身近に誰でもできるスポーツ、市の広報にあるヨガのようなものも進めていくといいです。森林公園としては、尾張旭市と連携し、健康イベントの開催を大いに進めたいと考えています。森林公園は、皆さんの健康増進の役に立ちたく、来園をお待ちしています。

伊藤　ありがとうございました。私もスライドを作成してきたので、少し説明をさせてもらいます。『尾張旭市のブランディングと SDGs』をテーマに話をします。自己紹介ですが、私の専門分野は環境政策、環境教育、都市地域経営です。社会実践活動としては、2003 年度から国内外の小中学校や高等学校と連携し、地域の CO2 濃度調査に基づく環境教育の実践に取り組んでいます。実際に子どもたちに学校周辺の CO2 濃度を測定させ、濃度が高い地域はどのような地域なのか、濃度が低い地域はどのような地域なのかを実感させる環境教育です。

尾張旭市との関わりとしては、市内にある大学なので、日頃からさまざまな面でお世話になっています。健康都市づくり懇談会、総合計画審議会、自治会等活動促進助成事業候補選定会議などに参加をさせてもらっています。特に自治会等活動促進助成候補選定会議の参加を通じて、尾張旭市の自治会、町内会における地域活動は非常に活発で、質の非常に高い活動が展開されています。その意味で、尾張旭市のまちづくりの資源は、自治体会と町内会の地域活動にありますし、この活動こそが尾張旭市の財産と言えます。

尾張旭市商工会議所とも連携し、2005 年に愛知万博が開催をされたときには、その前段で尾張旭市の緑を生かした集客交流イベントとして、エコウオーキングを 4 回ほど企画、実施しました。先ほど愛知県立芸術大学の 2 年生の学生さんが発表をされていましたが、本学の 2 年生の学生たちが尾張旭市の緑を生かし、市外から人をどのぐらい集められるかをテーマに企画をしたのがエコウオーキングです。実績としては、名古屋鉄道とタイアップをしたときに、市外から 3000 人の方に訪れてもらいました。学生が導いた答えとしては、市外から緑を求めて、3000 人の集客を確認できました。先ほど環境教育の話をしましたが、市内の小中学校でも環境教育を実施しています。

本日は、私の専門分野や尾張旭市における健康都市プログラム、総合計画の策定に関わった経験を踏まえ、健康都市としての尾張旭市の特徴と魅力づくりについて話をします。これは私が作った絵ではなく、尾張旭市の健康都市推進室が作成したものです。尾張旭市は、2004 年 8 月に健康都市宣言をして、総合計画、健康都市の取り組みを進めてきました。総合計画、健康都市の取り組みは、SDGs と多くの共通点を持っています。今後は、SDGs の視点に立って、尾張旭市の取り組みを継承、発展させていこうと

市は考えていますが、私もこの考え方には非常に共感を持って、受け止めています。

具体的にどのように発展をさせていくかというと、右上の図が尾張旭市の健康都市づくりのスキームで、体の健康、心の健康、町の健康の大きく三つです。環境教育の視点から見ると、町の健康は環境保全です。町の健康づくりと環境教育は関連しています。私たちが取り組んでいる環境教育の背景としては、町の健康づくり、町の環境保全にとって、カーボンニュートラルへの対応は避けて通れない課題です。その実現には、人々の意識変容、行動変容が非常に重要になります。国際的に見れば、よりいっそうの国際協調が不可欠です。

その中で、私たちが取り組んでいる環境教育は、身近な地域の CO2 濃度調査を通じて、子どもたちに CO2 の排出源、吸収源の影響を自覚してもらい、その改善に向けた環境行動を実践できる人材を育成していくことです。環境教育は、ちょうど本年で 20 年目になりますが、これまで日本と台湾の小中学校、高等学校の延べ 161 校で実践し、6000 人を超える児童生徒が参加をしています。現在、ベトナムとインドネシアでも環境教育の展開に着手をしています。尾張旭市では、これまで西中学校と旭中学校で実践しました。20 年前に初めて環境教育を実践したのが西中学校です。

本年 2 月には、市内にある 9 校の学校を対象に CO2 濃度測定器を配置し、教室の CO2 濃度測定による換気対策を行います。オミクロン株の感染が拡大をしているので、換気対策に役立てるために測定器を配置しました。現在、取り組んでいる環境教育と SDGs との関係としては、大きく二つの取り組みを進めています。1 点目は、学校応援プロジェクトです。環境 CSR を推進する企業と連携し、東海三県の小中学校、高等学校を対象に気候変動、植物の光合成実験と新型コロナウイルス感染症、教室の換気実験に対応した環境学習を支援しています。

2 点目は、持続可能な地域づくりに向けた市民科学の創成です。環境教育の対象を成人教育に拡大しています。具体的には、地球温暖化防止活動に CO2 濃度データを活用します。これは岡崎市で 3 年ほど前から取り組んでいます。学校応援プロジェクトは、SDGs の目標の 3 番、4 番、13 番に該当します。3 番は健康と福祉、4 番は質の高い教育、13 番は住み続けられるまちづくりです。持続可能な地域づくりに向けた市民科学の創成は、4 番と 11 番、13 番に該当します。

SDGs の視点に立った尾張旭市のブランディングです。ただ今、環境教育を通じた SDGs 達成の貢献について話をしました。環境教育の実践は SDGs の 4 番、11 番、13 番に貢献し、換気対策の視点は SDGs の 3 番に貢献すると言いましたが、尾張旭市の健康都市づくりと SDGs の接点を考えたときに、SDGs の 3 番、4 番、11 番、13 番の目標は非常に重要です。3 番、4 番、11 番は何か意味するかというと、尾張旭市が 2019 年 10 月に SDGs 市民アンケートを実施しました。その中で、尾張旭市民の皆さんが取り組んでほしいと答えた目標は、SDGs の 11 番の住み続けられるまちづくりが最も多かったです。SDGs の 3 番の健康と福祉、SDGs の 4 番の教育も市民の皆さんは非常に重視していました。

この結果を踏まえて、尾張旭市のブランディング強化に向けた政策形成例を紹介します。尾張旭市は、これまで健康都市づくりを進めてきました。具体的には、健康都市プログラムを推進し、市民の皆さんに健康ウォーキングを奨励してきました。それに加えて、今後のまちづくりの展開方法としては、ゼロカーボンシティを表明することです。先ほどの脱炭素宣言です。ゼロカーボンシティを表明することによって、町の健康づくりに対し、新たな価値を創造できます。尾張旭市は、公園都市づくりを進めています。緑豊かな都市をつくることは、CO2 吸収源対策の充実を図ることになります。その上で、森林公園の持つ緑は、非常に大きな価値を持っています。

SDGs 未来都市という国の制度がありますが、SDGs 未来都市を活用し、健康都市づくりと地域経済の

好循環をつくります。例えば、健康ウォーキングを核とした集客交流の仕組みづくりもできるかもしれません。愛知県には38市ありますが、ゼロカーボンシティを表明している市は15市、SDGs未来都市の認定を受けている市は6市あります。表明や認定が重要なのではなく、ゼロカーボンシティを表明することによって、尾張旭市のまちづくりの新たな展開を考える、魅力づくりを考えるきっかけになります。私の提案は以上です。ありがとうございました。

パネリストの先生がたから自己紹介と併せて、尾張旭市の特徴や魅力、今後のまちづくりに向けた課題、提案について話をしてもらいました。本日は、市制50周年記念行事です。尾張旭市の魅力を高めるために、市民の皆さんとまちづくりの課題を共有し、今後のまちづくりの在り方を話し合うスタートになればと考えています。パネルディスカッションの進め方としては、先生がたのまちづくりの提案等について理解をより高めていくために、私から先生がたにいくつか質問をします。

その上で、先生がたの発表の中にもお互いに重複する部分、関連する部分があったので、パネリストの先生がたから他のパネリストの先生がたに質問や確認をしてもらいます。パネリスト間のディスカッションをして、最後にパネルディスカッションをまとめます。私からパネリストの先生がたにいくつか質問をさせてもらいます。水津先生に質問です。市民の皆さんが町の気に入った風景を見るためにみずいろベンチを置くという取り組みについて話がありました。1点目の質問は、水津先生が尾張旭市の中にみずいろベンチを置くとしたらどこに置きますか。2点目の質問は、三郷に住まわれていたと言っていましたが、尾張旭市の魅力として、どのような部分を磨いていったらいいと考えますか。

水津　私が住んでいた頃の住民目線でお答えします。三郷の北側あたりに住んでいて、まさに先ほどの渋滞問題は日常の課題でした。良かったと思う記憶で言うと、ため池がたくさんあります。歴史の中で消えていったため池もあるはずですが、さまざまなため池が残っています。池の周辺に住んでいる方の池との接点の持ち方には、さまざまなバリエーションがあります。例えば濁池は、池を楽しむような形で人が住んでいます。名前に濁ると付きますが、岸の住まい方と池の関係が本当に素晴らしく、一つの理想の形です。その隣の維摩池は、公園としては非常に雰囲気のいい整備がされています。

先ほど学生からも水に関する提案がありましたが、どうしても水のある景色に目がいきます。矢田川も河原の河川敷が好きで、何回か行ったことがあります。鳥も非常にいて、歩くのが非常に気持ちいい場所です。資源の管理というと、危険を防止する、なるべく手のかからないメンテナンスをする等の話にいきがちですが、いかに楽しむかから生まれる人と資源との関わり方で見直してみると、楽しむ対象はまだたくさん見つかる気がしています。ベンチは、景観資源を見つけるときの方法論でしたが、その意味で楽しむ資源を見つけるために、人がその場に一定期間いられるためのベンチも面白いかもしれません。

伊藤　尾張旭市には、ため池が散在していて、特徴的な景観をつくっています。活用可能な資源であり、非常に身近に感じられるものです。水野先生にお聞きします。先ほど尾張旭市の歴史的な資源として、条里制の遺構や聖なる白山などを紹介してもらいました。私は素人なので、変な質問かもしれませんが、1点目の質問として、歴史的な資産の価値をどのように評価しているのでしょうか。例えば、歴史的遺産だと国宝級、県の無形文化財級などのクラス分けがありますが、それとは少し違った見方になるのでしょう。歴史的な価値を教えてください。2点目の質問は、提案の中にふるさとガイド旭と中部大学の学生との共同によるフィールド調査の話がありましたが、共同のフィールド調査によって、何が明確に

なっていくのでしょうか。その2点について教えてください。

水野　さまざまな歴史上の価値があり、例えば重要文化財、国宝などは非常に価値があるものだと分かりやすいですが、質問の中にあったように別の価値もあります。例えば、条里制の遺構が残っていることは、極めて重要なことです。この地域が非常に古くから開発されていることを意味します。開発された上で遺構が残っているので、それに基づいた歴史が壊されなかったことが中世、近世を通じて、現代に続いていたことになります。

これは古代での開発が無理なく、地域において有効な意味でもって、そのまま続いたことを意味します。地域によっては、例えば河川が氾濫して、遺構が崩れてしまうこと、町の開発によって痕跡が全く残らないこともあります。遺構が残っているのは、歴史的な状況としてずっと維持された上で、それまでの歴史や人々の歴史、生活が成り立っていたからなので、持続可能な社会を考えた場合に見直すべき評価、価値が出てきます。

私は、現代社会においてどのように利便性を追求し、効率よく人口の変動などの問題という即応的なことについて提言をするのは難しいですが、長い年月の間にその地域で人々がどのように暮らし、何を楽しみ、何に苦しみ、生活をどのように改善しようとしてきたのかの歴史的な痕跡が土地の在りよう、地域の村の在りように現れてきます。人々の自然に対する働き掛けです。苦労した部分は改善をしようとして、長い年月をかけて変えてきました。いい部分は、そのまま残ることで出てきます。その辺りを見ていくと、価値があるものだと再評価できます。

学生と調査をするときに、例えば聞き取り調査の場合、70代や80代、90代の方に昔、地域がどうだったかの話を聞くと、学生は昔のことは分からないので、学生にとっても勉強になります。90年前の尾張旭市はどのように感じだったか、どのような遊びをしていたか、人々はどのような暮らしをしていたかの話をすると、年配の方も私たちが聞くよりは若い学生に話すほうが恐らく話しがいがあるでしょう。年配の方も元気になりますし、学生も当時のことを知れるので、勉強になります。その中で、さまざまなことが分かってきます。いろいろな方の話をつなぎ合わせていくと、当時の暮らしがよく見えてくるので、それも価値として歴史研究の中で重要です。

実際にいくつか活動もしていて、中部大学のある春日井市松本町では、地区ごとに自治体史、地区史をいくつか作っています。松本町史を作る際には、多くの方に聞き取り調査をさせてもらいました。例えば昔、あの場所に炭鉱があって働いていた話、亜炭を採掘していて、採掘するときに危険もあった話、この場所では昔、ナマズが取れた話などが聞けて、昔の自然豊かな様子もよく分かります。聞き取りをすることで、現在はそれがなぜ失われているかを考えるきっかけにもなりますし、地域の環境の変化など、さまざまなことも分かってきます。史料調査だけではなく、聞き取りも含めてさまざまな調査をしていくと、新たに気付くことがたくさんあります。

伊藤　残っていること自体が価値であること、聞き取りをして、伝承も含めて残してしていくが価値を高めることにつながるのでしょうか。

水野　はい。私たちは、史料は大切なものだと言っていますが、なかなか理解されにくいです。例えば、江戸時代の史料でも史料は一つしかありません。その史料がなくなると、過去のことが分からなくなります。例えば、古い民家の方、古い蔵を持っている方が残っていたものを処分してしまい、江戸時代の

史料などがあったとしても全て処分されてしまうこともあります。史料がなくなると、そこに書かれていることはもうたどれませんし、分からなくなります。その意味で、非常に貴重なものです。史料は一度、失ったら分からないので、復元できません。歴史的なものは、調査の上で貴重なものであれば保存、活用できるといいです。

伊藤　条里制の遺構が残っているのは、渋川神社ですか。どこなのかと関心を持つ方もいるでしょう。

水野　式内社だという話もあります。水の話もありましたが、昔から神社は、きれいな水が流れている所でないと建ちにくいです。地域において開発が早くからされている所、その地域における中心地など、条里制がある所は、それなりに整っています。神社が置かれる所も、それなりに開発が進んでいる重要な場所です。尾張旭市域で施設や歴史がどのように展開したかという中で、地域の重み、どのような文化状況だったのかなど、歴史的なことがさまざまなことが見直されるのではないでしょうか。

伊藤　松本先生にお聞きします。昨年 12 月に発表されたばかりのデジタル田園都市国家構想の活用についての話の中で、そのために未活用の土地の活用を図る、大学の資源を活用するなどの話をされていました。まだ構想そのものの具体性がない中で、まずは手を挙げてアプローチをするべきだと言われていましたが、先生の持っているイメージについてもう少し教えてもらえると、皆さんの理解がより進む気がします。

松本　デジタル田園都市構想は、名前からも分かるように田園都市が対象です。東京都、大阪、名古屋、横浜などの大きな都市は初めから入ってきません。大きな競争相手がいないので、ライバルがいません。大都市を除いた地域でデジタル化が進んでいる町、市があるかというとありません。これがなぜ出てきたかというと、新型コロナウイルス感染症によって、日本はデジタル化が全く進んでいないことがはっきり分かったからです。政府が焦っただけの話なので、政府に案があるわけがありません。読むと、44 ページあります。それを 7 ページに短縮したものもありますが、政府が何をどのようにしたいのかは分かりません。私が先ほど出したポンチ絵をよく見ても、何をしたいのかが全く読めません。

私が尾張旭市の森林公園に携わり始めてから 10 年以上がたちますが、その間につくづく感じたのは、尾張旭市は非常に便利な場所です。それと同時に、自然がたくさんあります。日立や富士通などの IT 産業もあります。それが生かされていないというか、そちらに全く目が向いていません。例えば、尾張旭市では 1 月に新年名刺交換会が開催されますが、この中に IT 産業の人たちは 1 人も出てきません。出てくるのは、農業協同組合の責任者や地域の有力者ばかりです。その様子を見ていると、典型的な近郊都市だと感じます。名前を出して申し訳ないですが、農業協同組合がどうして出てくるかというと、例えばイチジクは尾張旭市だと一生懸命に言っています。皆さんは、イチジク農家を知っていますか。市内に 2 軒しかありません。

先ほども話に出たように、ため池がたくさんあります。ため池は何のためにあるかというと、水をためるからため池です。これは全て水田のためにあります。森林公園の周りには、大きな池がたくさんありますが、全てため池です。2015 年にため池の一つが決壊しましたが、それは作り替えません。なぜかというと、その下に農家が 1 軒もないからです。ため池は、将来、放っておけば全てなくなっていきます。この自然をどのように保つかについても考えなければなりません。

デジタル田園都市は、緑を基本にしています。先生が出していたように、働く場所と住む場所に常に緑があるとともに、便利にしていきます。コンパクトシティとデジタル田園都市化を組み合わせていくことが非常に重要です。デジタル田園都市化を考えたときに、パソコン等のための電気のエネルギーは必要ですが、空気が汚れるなど、大きな工場都市が要るという話ではありません。頭とパソコン、電気、家庭の場合なら働くための6畳間が1室あればいいわけです。これをきちんと保証するような環境づくりが重要です。市がするべきことは、その環境づくりと環境があるからぜひ寄ってくださいとアピールすることです。

名古屋市は何をしているかというと、ソフトバンクグループと一緒に鶴舞にある勤労会館の跡地に7階建てのビルをつくり、そこに人を集めると言っています。これはこれでいいですが、ビルディングなので、デジタル田園都市の構想とは相いれません。そこに尾張旭市が手を挙げ、デジタル田園都市構想を推進するための非常に大きな機会が目の前にあります。中身は、公務員の皆さんが詰めることです。専門家ではないので、細かいことはできませんが、プロの人たちがいます。ITの人たちにどのような環境が欲しいのかと聞いて回って、ふさわしいものをつくればいいわけです。

彼らが欲しいのは、遊びと仕事ができる場所です。尾張旭市は、健康都市を掲げているので、別に沖縄に行かなくても尾張旭市に寄って、疲れたけれどもすぐ横にテニス場があるから運動をしようというものを健康都市と結び付ければいいです。大きな施設を1カ所つくって、周りに小さいものをたくさんつくって、疲れたらスポーツができるようにすればデジタル田園都市の一端を担えます。総合的に考えて、尾張旭市は非常に有利な場所にあります。その意味で、この構想は尾張旭市のためにつくったのではないかと先ほど言いました。ぜひとも市長にもお願いしたいです。周りがきちんとしてくれれば、市長は中身が分からなくても構いません。必要なブレーンをそろえて、行ってもらいたいです。

伊藤　IT産業の活用の話がありました。国は、デジタル田園都市国家構想を進めようとしていますが、先生の話を聞いていると、デジタル健康都市構想のイメージになるのでしょうか。ありがとうございます。パネリスト間のディスカッションに移ります。パネリストの先生がたの発表を聞いていると、例えばコンパクトシティや健康都市など、重なっている内容もありましたし、関連する内容も含まれていました。まちづくりの課題は、一つ一つが独立しているよりも他の課題と関連しているケース、複数の課題を同時に解決することで、相乗効果が得られるケースも多いです。その意味で、パネリストの先生がたから他のパネリストの発表内容に対する質問や確認、他のパネリストの発表内容を踏まえた追加の意見や提案をお聞きしたいです。松本先生からお願いします。

松本　水津先生にぜひアイデアをお聞きしたいです。水野駅のそばに住んでいると聞きましたが、私はたとえポイントが付いても、付かなくても避けたいです。そこは通らずに水野駅から回るか、尾張旭駅のほうへ回ります。下手すると10分以上かかるので、ポイント制だけではなく、渋滞を物理的に解決する必要があります。私は毎日、森林公園に出勤するときに山手通りを通って、半地下というか、名古屋鉄道の線路の下をくぐって、茅ヶ池の交差点方面に行きます。以前、名古屋鉄道を高架化してくれないのかと思ったことがあります。現在から約60年前の私の経験ですが、名古屋のほうにある堀田駅を高架化するときに、名古屋鉄道は一銭も出しませんでした。

自分たちは高架化しなくてもいいから、あなたたちが全てお金を出しなさいと言いましたが、高架化した後は、名古屋鉄道が下の空いた土地を全て駐車場で貸すので、丸もうけです。坊主丸もうけと同じ

ことをするので、ここで同じことはできません。それだけの財力はありません。どのような形で渋滞を解消したらいいかについて、何かアイデアはありますか。私は、山手通りと同じように道路を掘って、下を通すのが安く済む気がしています。南側に2、3軒や塾があると、あの前で親が車を止めます。次の信号で引っ掛かって、全く前に行かず、車1台分が通ったらすぐにまた信号が変わってしまいます。ターミナル化も考えられるかもしれませんが、もっと現実的なアイデアはありませんか。

水津　それができていたらうまくいっています。その話は、私も学生もたくさん話を聞いてきましたし、市役所の方からもアンダーパスやブリッジなど、これまで行ってきたことも聞いてきました。さまざまな考え方がありますが、それぞれ一長一短あります。それをしたからといって、必ずしも解決するとは限らないような問題があるそうです。私は、駅のちょうどすぐ北に住んでいたので、渋滞は避けられません。一歩出たら完全に巻き込まれる状態なので、それを日常とするほかありませんでした。議論の中で、そもそも駅前にあれだけ交通が交差する必要があるのかという話が出ました。

あの場所は、旧街道と新街道が接近していて、そこに南北の軸が通っていて、踏み切りや信号も絡んでいるような最悪な状況です。例えば、あの道をパスするのをやめて、通さないように全て歩道空間にします。南北から来る人は、バイパスがなければ困るので、バイパスは整備してもらって、あの道に一極集中するのを避ける手もあるかもしれません。それは周辺の方にしてみれば、先ほど学生が提案したように、歩いて暮らせるまちづくり的な拠点が生まれます。通り抜けの方が多いので、地元の方は本当に迷惑をしているでしょう。どこの大都市でも真ん中を抜く道路は、環状線をつくってさばいているので、同じようにセンターを抜けていくのをやめるのは一つの手です。

伊藤　三郷駅の渋滞問題に関心のある市民の方も多いでしょう。水津先生は、三郷駅前まち育てプロジェクトを推進していますが、プロジェクトに関心のある方も多そうなので、概要や目指しているゴールなどについて説明をしてもらえますか。

水津　組合が立ち上がって、事業者を選定するような段階なので、具体的な設計はこれからです。地権者の方が対象になる駅前の直近の所は、大きな開発が予定されています。駅前は、その周辺も含めて駅前です。本当の駅前を含めた周辺がどうなっていくべきなのかについて、より多くの市民から声を聞くために、私たちは昨年の春頃からフォーラムやワークショップを行っています。最初は、三郷駅前で皆がどのような生活をしているのかを言ってもらって、三郷あるある物語というマンガを作りました。そのアイデンティティーの上に今後、どのように在りたいかという未来のビジョンを SDGs 等の社会問題も含めて考えました。

この中で出てきたアイデアを再度、市民に返します。現段階では、市民の意見からなるべくたくさんの選択肢が見えるように手伝いをしています。その上で、これをぜひ目指したいという民意がつくり上げられると同時に、開発業者も含めた駅前の開発をする組合のかたがたも皆が喜ぶ町にしたいので、その対話ができるようなコーディネーションを行っています。決して、私がしたいまちづくりのイメージを押し付ける活動ではなく、デザインの意思決定の形での支援をしています。これも重要なデザインのプロセスと認識し、その手伝いをさせてもらっています。

伊藤　水野先生、お願いします。

水野　水津先生の話で、コンパクト化のスライドがありました。都市機能の集約と多様な生活様式、多様な環境があって、この辺りのデザインの仕方に歴史的なありよう、土地の高低、土地利用で歴史的、文化的な地域の違いがあります。その辺りのデザインをするときに、どのような配慮をされるのかについてお聞きしたいです。

水津　立地適正化計画には、私も委員として参加をしています。最初に違和感があったのは、どうしても都市機能の集約の 1 点に話がいってしまうことです。それは直近の社会的課題でもあるので、集約化をして、コストを抑えて、なるべくサービスをコンパクトにしていくことで、人口減少による難関を乗り越えようとするのは非常によく分かりますし、当然のことです。そもそも膨れ上がった町になってしまったきっかけは、戦後、田園がもっと美しかった日本をのべつ幕なしに開発していくことを許してきた都市計画の反省もあるわけです。昔の日本の町は、非常に集約化されていて、皆が集まり住む所と広い田園とのめりはりのある環境でした。

それが開発された町になってしまったことは、逆にチャンスです。先ほど先生が言ったように、歴史や地形、自然環境は、町全体にさまざまな個性を生み出す性格のものです。立地適正化計画のコンパクトシティーは、それとは全く関係がありません。人口が減るので、小さくして、効率をよくしようとしています。スマートシティーも IT も同様です。それは一つの指標ではありますが、必ずしも地域の豊かさとは関係ありません。1 個の大きな題目が出たら、必ずカウンター側の両方が成り立つようにしていくことで、町は豊かになります。

集約される家がたくさんあって、マンションがあって、まるで名古屋や大都市のような利便性の高い都市ができる一方で、郊外の非常に素晴らしさを生かせる町があるので、尾張旭市に住みたいという個性や特徴が生かせるわけです。その両方を生かしていかなければ、結局は効率だけの話になってしまいます。デザインの観点から考えると、どうしても生活の視点から尾張旭市がどのように魅力ある町に映るのかが重要で、コンパクトにしただけでは駄目なのが非常に気になったので、この提案をさせてもらいました。

水野　ありがとうございます。ただ今の話を聞いて、納得することが多々ありました。松本先生にも同じような質問をさせてください。レジュメに働きやすい環境の構築の話がありました。先ほどため池が作り直されないという話もありましたが、働きやすい環境の構築では、未活用の土地の整備、企業や個人の誘致について触れられていました。働きやすい環境は非常に重要ですが、企業の経済活動を優先するのか、企業で働く人々の環境を優先するのかなど、どのようにするかでも環境はいろいろと変わってきます。その辺りの先生の考えと歴史的、文化的な配慮ができるかどうかについて、先生の考えを聞かせてもらえると幸いです。

松本　IT 企業に難しい問題があるのは、アメリカの Facebook などのような、アルファベットか何か分かりませんが、新たに巨大なものが出来上がっているのもあります。逆にソフトの部分は、それほど大きな工場が要るわけではありません。日本の場合、台湾から IT 企業の工場を誘致する部分とソフトの二つの分野があります。尾張旭市が目指すものは、工場ではありません。デジタル田園都市なので、デジタルに中心を置くものになるでしょう。IT をしている人は、パソコンばかりというか、そちらの世界

のことばかりしていると、頭がおかしくなってしまいます。本当に欲しいのは、体を動かすものや心を休められる場所です。

彼らは、知的興味が非常に強いので、別に有名なものなどは必要ありません。有名なものとは、後世の人が決めているのであって、例えばそこに私たちが住んでいて、自分が使っていたものが 1000 年後などに発見されます。1000 年前の令和の時代に使っていたものが発見されたとします。先ほど言われていたように、現在では当たり前のものが全て捨てられていって、たまたま 1 個残っていたら当時、このようなものがあったというのが歴史になり、貴重なものになります。有名なものかどうかは未来の人が決めることであって、それを私たちがどのように楽しむか、どのような価値があるかは現在、決めていくことです。何も歴史的に国宝がある、何々があるからと考える必要はありません。現在、自分たちの郷里にあるものを楽しみながら仕事をしていくことは、大いに可能です。

伊藤　水津先生からも質問や確認があればお願いします。

水津　私は、伊藤先生のブランディングが非常に気になっています。書かれていることは最もだと感じながら見ていました。松本先生ともかぶりますが、森林公園のブランドは非常に大きいです。尾張旭市の北側の境界線は、全て森林公園です。矢田川の長さと同じぐらいの森林公園面積があって、これは大変なことです。先ほども少し触れましたが、非常に貴重な緑が多いことと接している価値があります。矢田川の河川敷も含めた周辺環境の緑地も価値がありますが、森林公園と接している価値をもっと生かす方法がないかをずっと考えています。

50 年前に旭台の開発があって、非常に素晴らしい桜並木があります。一個一個の地所も大きく、立派な宅地がありますが、森林公園の境界部分は石垣が組んであって、ざっくり切られているので、なかなか価値化しにくい関係になっています。好きな人は、あの場所から中に入っていくのかもしれませんが、そこに生活が見えないというか、町の形がウエルカムにしていません。県のものである故に難しさもあるのでしょうが、今後、森林公園を最大限価値化するまちづくりが行われると、強いブランドになります。私は、ブランドの中に森林公園も加えてほしいです。

もし尾張旭市が森林公園のブランディングを考えて、尾張旭市に住むことの魅力の中に森林公園を入れたときの森林公園の関係づくりですが、私は先ほどエコトーンのような中間領域をつくり、中にもっと入り込めるような形の話をしました。貴重なものは守らなければなりませんが、守るラインをもっと内側に設定して、例えば楽しむゾーンなど、森林公園と生活をつなぐようなアイデアは何かないでしょうか。この質問は、伊藤先生と松本先生にお聞きしたいです。よろしくお願いします。

松本　私は 10 年以上関わっていますが、ゴルフ場の取締役を引き受けるときに、なぜ森林公園に応募させてくれたら引き受けますと条件を付けたかというと当時、森林公園の管理費の大部分は、人件費に使われていたからです。バブルのときの後遺症があって、働いている人の給料が非常に高かったです。バブルがはじけた後も給料が下げられず、管理費が全て給料に回っていたので、森林公園もゴルフ場も荒れ放題でした。私が管理に入って、間違いなく良くなったのは、ゴルフ場です。公共のゴルフ場の中では、日本でナンバーワンだと自負しています。箱根にもありますが、ホテルにくっついていて、何万円ものお金を出して初めて利用できるゴルフ場です。

私が森林公園を初めて見たときは、本当にひどい状態でしたが、現在は胸を張って、良い場所だと言

えます。10 年前に比べて、森林公園そのものもずっと良くなりました。現在、尾張旭市と森林公園は緊密に連絡を取り合って、さまざまな行事を一緒に行っています。これは 10 年間、両者が本当に地道に話し合いをしてきたからです。以前は、消防学校と森林公園の関係、警察との関係が非常に悪かったです。同じ公務員同士なのに疑問でしたが、縦割りだからかもしれません。消防署の人が中で訓練に使いたいと言っても拒否します。それはおかしいので、初めは私たちと一緒にできるようにということをしながら、うまくいくようになって、現在はいい関係を築いています。

お客さまのクレームに対しても、私たちは絶対に逃げてはいけません。全て宝物だと受け取り、改善に努めてきました。絶滅危惧種に関しては、どうしても次世代に残していきたいです。そこにお金もかけられるようになり、現在の管理は非常に良くなっています。問題なのは、水津先生からも森林公園の境界にある石垣について指摘がありましたが、植物園は一般公園と違うので、入ってきて、中の貴重植物を盗んでいく人がいます。夜中にタケノコを掘っていく人、カブトムシを取りにくる人などがいるので、どうしても石垣を設置しておかなければなりません。

運動公園は、外乗といって、馬が走る所を散歩道にしている人がいますが、非常に危ないです。2026 年のアジア大会で乗馬が候補に挙がっていますが、まだ分かりません。そのときは、3 メートルほどのフェンスが住宅街との間にできるのではないかといわれています。他に問題なのは、これまで公園のすぐ横は空き地や畑でしたが、家がどんどん建っています。5 年もすると、森林公園の木の枯れ葉が落ちてきているから掃除に来い、何とかしろと言い出す人が絶対に出てきます。これは森林公園の価値が分かっていないとしか言いようがありません。

公園とは、パーク、パーキングからきています。パーキングとは何かというと、軍隊を置く所でした。ヨーロッパ等では、そこに戦場へ行く人を集めていました。公園ができると、その周りの土地の値段が上がります。価値が上がるわけですが、パーキングが公園に変わっていくときに、残念ながら日本では、その思想が取り入れられませんでした。なぜかというと、お殿さまの庭を公園にしたからです。徳川公園なども全て同様なので、基本的に芝生には入れません。どこに行っても芝生で、誰が何をしても注意をされないのは、森林公園だけです。これは大きな魅力です。

水津　公園を開くには、さまざまな問題があります。特に森林公園は、自然の豊かさを保全しなければならない問題も絡むので大変なのでしょう。本学も貴重種がたくさんあって、緑地の里山を管理しなければならないとずっと言われていますが、予算が建物に回ってしまってできません。10 年前に計画を立てましたが、実際には全くできていません。その中で、長久手市の環境課と一緒に水辺の研究者を含めた NPO 的な活動の人たちに入ってきてもらって、その方たちが随分と保全をしてくれています。大学は一銭も払っていませんが、現在は環境がどんどん良くなって、ギフチョウも増えました。湿地も多様性がより豊かになっています。自前で全て仕切って、その中で何とかするのは、なかなか難しいです。最近は、それが喜びになる人、価値があると分かっている人と組むことで、さまざまなものを打開していくような経験をよくしているので、松本先生がいる間に何かできることがないかと非常に期待をしています。

伊藤　森林公園は、まちづくりにとって極めて重要です。先ほどゼロカーボンシティを表明する話をしましたが、森林公園の価値は多面的にあります。その中で、CO2 の吸収源としての価値は非常に大きいです。その意味で、ゼロカーボンシティを表明することで、森林公園の価値を多くの市民の皆さんが再

認識してくれるはずです。再認識することで、町の探索、森林公園の活用、連携の仕方のアイデアもたくさん出てくるでしょう。

水津　先ほどストーブの写真を出しましたが、震災のときに都市機能が全てダウンして、誰も煮炊きもできないし、寒いときに、まきストーブを持っている人が熱源で皆を救ったという話がありました。その直後にまきストーブが売れました。現在、日本は森林問題があって、その問題に対する一つの回答でもありますが、防災の意味でも、森林の可能性はとてもある感じがしています。そこも含めて、森林公園のブランディングをしてもらえると非常にうれしいです。

伊藤　ありがとうございます。議論がなかなか尽きませんが、時間も迫ってきました。尾張旭市の今後のまちづくりに対する期待も含めて、最後に1分程度で一言ずつ意見をもらえれば幸いです。松本先生からお願いします。

松本　尾張旭市をこれまで以上に住みやすく、働きやすい町にしていくためには、市役所の方が一生懸命に頑張るのと同時に、住民の人たちも一緒に頑張っていかなければなりません。民間にやみくもな開発を任せるのではなく、市がきちんとした計画をもって、そのビジョンに基づいて開発をしてほしいです。

伊藤　水野先生、お願いします。

水野　私は歴史学を研究しているので、市域のかたがたには、歴史や文化、この地域にいた人々がどのようなことを考え、どのような生活をしてきたのかの苦労、努力、喜びをつかんでもらいながら、この地域に住むことに誇りを持ってもらえるような施策をよりいっそう推し進めてもらえるとうれしいです。

伊藤　水津先生、お願いします。

水津　市民へのヒアリングで最も印象に残った言葉が、尾張旭市はちょうどいいです。ちょうどいいとはどういうことかというと、少し行くと名古屋があって、藤が丘があって、バンテリンドームもあって、さまざまなものが割と近場にあります。この場所に特別なものは要りません。問題は現在、あるものの価値をもっと良く感じるように磨くことが足りません。それをぜひ進めてもらえたらうれしいです。

伊藤　本日は、『あさひの歩みから未来へ』をテーマに各ジャンルの専門の方をパネリストにお迎えし、ディスカッションを行いました。非常に有意義な話が聞けました。尾張旭市の魅力を高めるためのまちづくりの課題などについても共有できました。私自身は、まちづくりは市民の皆さんのさまざまな活動の舞台づくりだと考えています。まちづくりの課題、言い換えれば市民の皆さんのさまざまな活動の舞台づくりにとっての課題は本日、取り上げられたこと以外にも例えば子育て支援、高齢者福祉、教育、産業振興など、多岐にわたります。その意味で、本シンポジウムをきっかけに市民の皆さんが尾張旭市のまちづくりに関心を持ち、その輪が広がっていくことを期待しています。以上をもって、第3部のパ

ネルディスカッションを終了します。最後までご清聴ありがとうございました。

司会　先生がた、ありがとうございました。以上で、第3部のパネルディスカッション『あさひの歩みから未来へ』を終了します。先生方が退席されます。伊藤先生、松本先生、水野先生、水津先生、ありがとうございました。大きな拍手でお送りください。

クロージング

司会　閉会にあたり、尾張旭市長よりごあいさつさせてもらいます。

森　長時間にわたり、お付き合いいただきまして、誠にありがとうございました。登壇者の皆さんにも心から感謝の意を表します。ただ今の第3部では、有識者の皆さんの各立場から本市の特徴や魅力をはじめとした多くの意見を聞けました。シンポジウム全体を通して、私自身もこれまでの歴史、将来の尾張旭市について気付きをたくさん得られました。私に対する提案もありました。この場で余計なことを言うと怒られるかもしれませんが、まちの環境については、私も松本先生と同感です。デジタル田園都市構想については、全く分かっていないので、担当者と相談をします。

本市は今後、まちづくりの指針となる第6次総合計画の策定を控えていますが、市民の皆さんと共にまちづくりを進める上でも本日、有識者の皆さんに語り合ってもらい、参加者の皆さんと共有できたことは、非常に貴重な機会でした。皆さんにおかれましても、本日を機に尾張旭市にさらなる愛着を持って、まちづくりに積極的に参加をしてもらうとともに、旭のこれまでの歩みの是非を次の世代に引き継いでいってもらうことを願っています。新型コロナウイルス感染症の拡大による厳しい状況が続きますが、皆さんのご健勝とご多幸を祈念し、閉会とさせてもらいます。本日は、ありがとうございました。

司会　これをもちまして、尾張旭市制 50 周年記念シンポジウムを終了します。本日は、ご来場いただきまして、誠にありがとうございました。